ごみの減量化

90年代の前半に、『地球を救うかんたんな 50 の方法』という本が大変話題になった。これは、全米でベストセラーになった上に、世界各国で次々と翻訳された環境問題の本である。著者は、この本を通じて、私たちが意識していないささいな行動が積み重なると、実は大きな環境破壊を招くことになるのだと訴えている。そして、反対に、一人一人が小さな努力をするだけで、驚くほど現状を改善することができることも伝えている。

日本でも、近年、環境問題の見直しをめぐって議論が盛んに行われることが多くなった。そしてその内容は、初期には、大気汚染や工場排水をはじめ、ビルやゴルフ場の建設による周辺への影響、といった大きな問題を解決することだったが、次第に上の本に書かれているような、私たちの日常生活における身近なことに移ってきた。その一つに、ごみの減量化がある。

例えば、近ごろでは、スーパーマーケットの多くが、買った商品を入れるポリ袋の使用削減を呼びかけるようになった。買い物客が自分で袋やかばんを持っていくと、スタンプを押してくれる。そしてスタンプがいくつか集まると、わずかとはいえ、一定の金額を返してくれる。世論を受けて、ビンやカンなどを回収する箱を置いて、リサイクルに協力しようとする店も増えた。

主婦向けの雑誌や地域の新聞などには「あげます」「売ります」「ください」「買います」などのコーナーが目立つようになったし、公園や公共施設の場所を借りて不用品を安く売るフリーマーケットも増えた。スーツケースやベビーベッドのように短期間しか使わないものを、買わずにレンタルですませることにしたという人々も増えつつある。日本人は昔から節約を美徳とし、幼い時から毎日の生活を通じて古いものを大切に使うようにしつけられてきたものの、それはあくまでも、自分のものや自分の家の中のものに限ることが多かった。つまり、

Copyright The Japan Foundation

短くなった鉛筆や小さくなったせっけんをむやみに捨てないとか、家具や着物を代々直しながら使い続けるといった姿勢だった。だから、他人が使ったものを自分が利用するという考え方は、日本人にとっては新しく、ようやく広まり始めたところである。

年々増えていくごみに対して、行政側でも様々な対策が検討されている。最近では、分別収集もかなり徹底してきたし、まだ使える粗大ごみを修理した上で安く売るという試みを行っている自治体もある。とはいえ、行政に任せておくだけでは、ごみ問題の解決は容易ではないし、限界もある。私たちの後の世代に少しでも美しい地球を残すためには、むしろ、一人一人がちょっとした心遣いをすることこそ、大切なのではないだろうか。

Copyright The Japan Foundation